



対

談

宮地 正人

国立歴史民俗博物館・館長

×

中村 政則

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授

歴史的事実とは何か 文字資料と非文字資料のあいだ

資料の情報論・情報空間論

中村 1970年代の半ば、あるいは80年代に入って歴史学は、戦後歴史学から現代歴史学へと転換しました。神奈川大学では90年代、網野善彦・丹羽邦男・山口徹さんたちの代に大学院に歴史民俗資料学研究科を作りました。「資料学」に新味がこめられたわけです。今日は宮地さんの、ペリーの白旗書簡という資料が偽文書であるという議論を糸口にして、いろいろお話をお聞きしたいと思います。

宮地 私は1973年に史料編纂所に入って、第一次史料の井伊家史料の活字化に従事しました。その前提の第一次史料によった戦前の成果である「大日本維新史料稿本」はデジタル化されて全部公開されています。そこにはあやふやな事実は一切入っていません。他方、周知のことを身内に伝える書簡という、第二次史料における情報の意味を考えてきました。情報がいつ出て、どう伝播し、どう定着するのかという情報空間がいかに構成されるかに関心を持ってきました。現在私がいう「風説留」史料は膨大に集積され史料編纂所の書庫などに収められ、公開されています。その関心の中で「風説留中画像史料一覧」を編纂しました。表題は画像史料となっていますが、意図としては、大規模な「風説留」がどこに、どういうものがあるのかという文書目録を作りたかったのです。江戸時代の後期に随筆が好事家によって書き留められるのはなぜかという問題にも連なります。

中村 随筆ですか？

宮地 これは、むしろ民俗学の方が一生懸命取り組んでいます。古鏡だとか、斧だとか、古墳から掘り出したものをみんなで持ち寄った品評会の記事などがあります。好事家のやり取り、あるいは集まって勉強したときのメモ、そのとき写した絵とかです。それが、ペリー来航ぐらゐから変わり、好事家の記録ではなく、「風説留」という非常にリアルな政治情報となってくる。ただし、何が本物か、何が偽物かは、民衆にはわかりません。権力にしかわからないものが漏れるというのも、興味深いわけですが、彼らは真偽判定については、集める中で淘汰していくしか方法がありませんでした。ですから、「風説留」には正しいものもあれば、かなり省略されたり、間違って写されたものもあるし、完全な偽文書も入っています。偽文書だから意味がないということではなく、うわさ空間のなかで両方意味があるのです。むしろ、偽物の方が当時の民衆の気持ちをうまく表しているかも知れません。これは史学方法論としては情報空間論の大きなテーマです。

ペリーの白旗 正文書と偽文書

中村 宮地さんの論文「ペリーの白旗書簡は偽文書である」を読んだときに、ぼくもショックでした。日本が開港に应ぜず、戦争になれば米側が勝つに決まっているから、和を請いたければ、この白旗を掲げてこいという重要史料があります。宮地さんはこれを偽文書と見破った。

これほど高度な日本語を書ける人はペリー艦隊にはいないはずだ、ここから偽文書と見破ったのかなと思ったのですが？

宮地 嘉永6年8月から出始めるのですが、なぜ外交関係にだけ多くの偽文書が出るのか。幕府は、一切外交文書というのは公開しない。当然、日米和親条約の正文も公開していないのです。港を開いたとか、漂流民の扱いか、どういう内容の条約を結んだのかというお触書は出します。ただし、安政条約の場合には全文出すようになる。幕府が情報を公開するにつれ、偽文書が出なくなります。面白い対応関係です。当時3000万の日本人が、ペリー来航から国事問題、政治問題に焦点を合わせ始める。しかし情報は一切公開されない。それですから、幕府の弱腰の裏に何かあるはずだという、民衆の考えが裏返しにこの白旗書簡には出てくるわけです。うわさが流れたその直後にそのうわさそのものが文書になり始めるのです。

中村 交渉ごとですから、ペリーの幕府宛の公式文書にはなくても、やり取りの記録は残るのではないですか？

宮地 それは史料学の問題で、「対話書」という問答形式の記録がつくられます。後の記録には出ているのですが、不思議なことに、ペリーが来た6月4日から9日までの「対話書」は見つかっていないのです。

中村 明治の記録ですか？

宮地 幕末の少しあとで通辞がまとめた記録です。

中村 そういうやり取りが一部にはあったのでしょうか。中国はアヘン戦争で負けて、極端な不平等条約を押し付けられた（南京条約）これに対し、幕末開港を迫ったときのアメリカの対日政策は、砲艦外交なのかどうなのか、実際は、ペリーと日本との開港交渉では一発の砲声、大砲も撃っていない。いわば平和的な交渉だった。ペリー艦隊は功績を挙げたかったでしょうからね。

宮地 基本的には「砲艦外交」だと思います。一番大事なのは米国大統領の国書を受け取らせ、国書に対して返事をもらうことです。これがペリーの戦略でした。それ以前に浦賀に来たアメリカも含む外国船のやり方とは全く違うのです。幕府が要求しても退かない。武装した部隊を上陸させて国書を受け取らせる。返事をとる。日本人が肌で恐怖心を感じる中で、こんな手紙を蛇足で出すわけがない。

中村 ペリー艦隊は、脅しの空砲を撃ったり、祝砲を撃ったりはしている。しかし、日本が撃ってこない限り、

ペリーには砲撃の権限は与えられていなかった。

宮地 ですから、そこまでやるとははっきり言ったのはペリーなのです。それを6月4日に言う。そういう意味でも6月4日はクリティカルな日なのです。

中村 横浜開港資料館に白旗を掲げた図像が数枚あります。そのうちの1枚が、ペリー艦隊が連れてきたハイネの描いた絵でした。この絵を見ると明らかにアメリカが白旗を掲げています。他方、日本人の描いた絵というのは、全部アメリカ側が測量のために白旗を掲げているものです。大江志乃夫さんは、『日本書紀』には白旗は降伏ではなくて、戦闘停止で平和交渉という意味を表す記載があると述べています。「ダンス・ウィズ・ウルブス」という南北戦争の頃を舞台にしたアメリカ映画では、主人公が白旗を掲げてインディアンのところに交渉に行く。これは降伏という意味ではないのです。平和的に交渉しようという意味ですよ。降伏という解釈はやはり一面的だと思うのですが？

宮地 歴史家なら、オランダから相当な知識が入っているということを考慮します。白旗を掲げて彼らは測量をやっていると、白旗は武力行使ではないしるしというのは、もう周知でしたからね。

中村 当時の民衆にとってたった4艘の黒船でも、とにかくびっくりした、それは恐怖でもあった。

宮地 今まで幕府の言いつけを守っていたのが、ペリーは戦闘行為に入っても辞さずという態度をとった。にもかかわらず、幕府が動けないという、この事態に恐怖したのです。ですから、白旗書簡というのは現実の史料より面白いのです。私は単なる偽文書ではなくて、まさにそのうわさ空間が持っていた気持ちの結晶化だと思います。

中村 ペリーの白旗書簡の問題は、外圧に対する日本人の対応の原型を知る上で非常に面白い話だと思います。

文字資料と非文字資料

中村 文字資料と非文字資料の関係は順列組み合わせで言えば4通りあるわけです。文字資料は文字資料だけで読む、非文字資料は非文字資料だけで読む、あるいは双方で補完されなければいけない。文字資料と非文字資料は両輪であるという言い方もあります。いずれにしる、相互補完されながら歴史像を豊かにしていくということなのだろうと思うのです。



対談

宮地 アーカイブズ学を発展させればいいという単純な考え方には研究者として賛成できません。私の勤務先が博物館ということもありますが、英米のアーキビストは国家の蓄積した情報をいかに見せるかが仕事です。われわれは研究者として、資料情報全体をどう把握するかという課題を課せられています。私の専門の幕末維新期で言うと、文字史料と有機的に結合させながら、錦絵、摺物、手書きの画像資料そして写真資料を組み合わせ、非文字資料学をどう作るかという課題にぶつかっています。具体的に言うと、ペリー来航のときには、錦絵はほとんど出ません。摺物は100枚限定とかというお目こぼしのかたちをとって出されている。錦絵は完全な分業システムであって、一人ではできないのです。資金的には絵草子屋が相当の資金を用意し、人間も100人単位で関わる。錦絵がなぜ江戸絵とか東絵と言われるかという、江戸でしか組織できないからです。

中村 横浜はどうですか。

宮地 横浜で出回るものは、ほとんど江戸でやっています。大阪は小規模ですが、京都は結局、錦絵が出ないで、銅版画が出る。安政の大地震のときは、町奉行所の監視の手がまわらず、鯨絵がどっと出ます。町奉行所が再機能した途端に出なくなる。ですから、情報錦絵として一番早く出るのは、私は横浜絵だと思います。幕府もお目こぼしをしますが、攘夷運動が起こる文久3年になるとぱたっと止んでしまう。性格上、錦絵に政治風刺がないのは当たり前なのです。風刺をやったら捕まって獄死ですからね。錦絵だけ研究しても、当時の人間が要求していた画像情報の全体はわからないのです。いくつかのカテ

ゴリーの画像資料の組み合わせの中で初めて全体が見えてきます。

中村 ペリーの人物画像がありますね。なにか怖い顔をしたものです。だんだんマイルドな顔になっていくように思うのですが、編年的にペリーがどう描かれてきたかという研究はあるのですか。

宮地 異人像ですね。嘉永7年に2度目に来たときはみんな実際の顔を見ているから怖くなくなる。ただし、色刷りのものは、あまり見たことはありません。私は摺物で、手彩色だと見えています。特に船は錦絵ではありません。安政五カ国条約のときは、摺物で出されます。情報論として画期的なのは、『太政官日誌』を明治元年2月に政府が出してしまうということです。見せることによって世論をキャナライズする方向に変わったというのは、江戸時代の方針からすると180度の転換だと思います。

画像 肖像画をめぐって

宮地 編纂所にいた時に、黒田日出男さんと、江戸期の画像情報で文字資料だと伝えられない情報とはどういう性格、種類のものがあるかということを議論しました。一つは人の肖像画です。肖像画というのは、芸術的評価より、似ているか似ていないかという「肖似性」が要求されます。2つ目は、物産画です。これはいくら文字で説明しても仕方ありません。本草学は、絵心を持っていないと自分が採集した薬草を残せません。今日のボタニカルアートという分野です。3つ目は、記録画です。幕末でよく残っているのは、小笠原の調査ですね。これは近代に入ると完全に写真家の役割になります。4つ目は報道画です。ペリーの来航、長崎へ来たプチャーチンの船の画像は残っているわけです。5つ目は、歴史画というのがあります。人物なり、風俗をその時代の歴史にあわせて描く。19世紀、歴史が民衆に意識され始めた時この歴史画が登場してくる。それから最後に絵図です。日本の場合には、正確であると共に見て楽しくなければ、地図ではないのです。これは日本の伝統ですが、フランスの地図作りも、必ず地図の中に景色とか建物を入れています。明治10年代にビゴーは地図づくりの絵師として陸軍省に招かれる。なにも風刺画を描きに来たわけではないのです。最後に写真が入るわけです。写真導入以後、幕末の絵師が絵と比べてどう考えたか、興味深い社会史の問題になるわけです。



宮地 正人

国立歴史民俗博物館・館長

中村 フセイン銅像が倒された時、テレビでは何億、十何億の人が見ていた。しかし、あるシンポジウムで見た遠景写真には、広場に100人程度しか人はいない。つまり、あれは作られた画像なのです。フレームの問題です。政治的事件などについて言えば、連続写真、ラッシュならよいという考えがありますね。それをどこか一箇所とると作為が入ってしまう。

宮地 文献に関する史料学はかなり確立しているので、何が本物なのかというのは、だいたいわかります。ただし、文献史料以外の資料学は写真も含めて十分確立していないままに、一人歩きしてしまっている。偽文書か本物の文書かという中間のところで、本物だけど、繰り返しそればかり出されると誤ったイメージを生み出すという、それをメディアイベントとメディア学の人には言っているようです。森村誠一さんの731部隊でもそうですが、一番足をすくわれるのは写真なのです。非文字資料におけるテキストクリティーク、資料学を、それぞれの特殊性に応じてどう確立するかが今最も問題なのです。

ヒストリーとは

中村 歴史家が対象にしているのは事実ではなく、表象だという歴史の言語論的転回論、歴史構築主義の議論があります。ある視点から構築したものが事実だということです。私は反対です。われわれ歴史研究者は資料を読み、資料間に連関をつけながら歴史像を描き、解釈します。違う解釈も成り立ちます。したがって、時間が経てば再審にさらされる。事実の確定が進んで学説がくつがえされることはありますが、解釈で学説がひっくり返ることはほとんどない。

宮地 第一次史料をできるだけ集め、読み、考え、研究するのが歴史研究者の一番の楽しみです。学問の蓄積の上に1頁を付け加えるだけです。歴史研究者は、職業家集団として過去に責任を負っているのです。これは信用して使える史料だ、しかしこれは偽文書だと明確に言えなければ、歴史研究者ではない。歴史研究者はなによりも職人だと思います。ろくなものも作れない人は、そこにいなければよいのです。

中村 問題意識を持って史料を見る必要があります。実証だけすればよいのではなく、何が真実かを見抜く力がないとだめだということです。ヒストリーの語源について、コルバンは歴史＝物語ではなく、臨床の記録だとい



中村 政則

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所教授

い、それに弁論術が結びついたという。面白い見解だと思いました。私は客観的な実在としてのthe historyを認めるのかどうか分かれ目だと思います。これに対し、「言語論的転回」では客観的事実があるのではなくて、記号をつけてはじめて人間の意識に入る。それで、はじめて存在が確かめられる。こういう議論ですね。それに対して私は、なにも名前のついてない星もあると思うわけです。そうでなかったら、太陽系自体存在しないことになる。だから、the historyはあると思っています。

宮地 歴史を専攻する人間は、事実にとだわる性向の人間がやるもので、拘泥しないか出来ない人は、やめたほうがいい。誰でも医者になれる訳ではないのと同じ論理です。

中村 宮地さんは新史料から新事実を発見するという職人的歴史家ですね。むかし遠山茂樹さんに、歴史家の社会的責任に言及した、「職人的研究者と生活的研究者」という好論文がありました。職人的歴史家でも文字資料だけでは豊かな歴史は描けない。非文字資料と組み合わせる必要があるわけです。非文字資料についても同じように、資料批判が必要だということです。

宮地 幸か不幸か、現在では両方できないと駄目だと思います。画像だけですと、印象批評になり、使いものになりません。それは評論家のやることで、研究者のやることではないのです。自分の作ったものは自分で責任をとる職人魂がないと駄目なのです。ただ現在では、夢にまで見たコンピュータ画像処理ができるようになり、文献資料と結合できる可能性が開かれ始めました。と同時



対談

に、歴史系民俗系博物館にはストーリーがないと、絶対に展示できません。しかも展示というのは、結論ではない、しかも中間段階のもんです。論証するにはモノグラフが必要です。きちんと出典を示し、自分の論理構造がわかるように、一つ一つ論証しなければならない。博物館展示と研究報告は、不可分離的なペアになっているのです。博物館は面白いけれど、危険なところだということをおぼえなければいけませんね。展示はあくまでも中間的な成果発表、その根拠や論証は、論文・研究報告でまとめないと絶対に駄目です。

戦争展示の考え方

中村 そこで、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の戦争展示の考え方をお聞きしたいのですが。

宮地 歴博はナショナルミュージアム・オブ・ジャパニーズヒストリーですから、戦争展示があると対外的に思われています。これまではスタッフが前近代中心ということもあって、今一番新しい展示は、関東大震災ごろです。現代史展示をする方向は決まっていますが、ナショナルミュージアムですから、戦争が平和かの展示はしませんし、出来ません。事実に基づいた展示を通して、見る人の責任で判断してもらおうばかりありません。歴博があるところは、江戸時代の佐倉城、明治7年から歩兵第2連隊、日露戦争後からは歩兵第57連隊の跡地です。戦争一般の展示はスペース的にできないので、「佐倉連隊と地域民衆」というテーマで現在展示企画を考えています。このテーマを仲間と勉強する中で、一度虚心坦懐に軍隊の角度から近代日本を考えないと、本当の通史はできないのではないかと痛感しているのです。日本の近代化の起動力はやはり軍隊で、産業革命ではないと思います。軍隊というのは、明治初年に、二階建てのベッド式の兵舎で、着物の百姓が20歳から、徹底的に三年間の訓練を受け、そこで洋式下着を着用するなどの経験を経て近代化していきます。佐倉も、2500人の連隊の将兵を養う町として近代化していくのです。戦前の町の中で目立つのは、写真屋と靴屋です。将校は、自費で革靴をつくらせる。佐倉から西村勝三という、日本初の製靴企業家が生まれました。注文主は陸軍です。また、連隊は病虫害に強く安い野菜を大量に納入する農民のお得意さんでもありました。軍隊と地域との関係は意外と、奥が深いのです。

中村 山田盛太郎氏は、「戦前日本資本主義には、景気循

環はなかった、あったのは戦争循環だ」と言ったことがある。また軍隊と地域の関係では、荒川章二さんが『千葉県史』などを使って、日露戦争における各連隊の戦死者の具体例を調べていて参考になりました。

宮地 連隊関係の出版物はかなりあるのに、それがうまく収集されておらず、図書館にも入っていません。佐倉連隊は、西南戦争からレイテ玉砕まで参加していて、連隊史の歴史そのものが日本陸軍の歴史になるのです。

また、戦後連隊史を作っているところと、作っていないところがある。生き残った人が、自分の戦友を悼むかたちで、本にしたいか、したくないか。これもごく小さな例ですが、我々の周りには、あらゆるところに、戦争を考える手掛かり、資料があるのです。

中村 スミソニアン博物館の原爆展示はアメリカ在郷軍人会の反対があって、結局、原爆被害の実態は見せず、エノラゲイだけを展示した。原爆投下により戦争が早期終結して多くの兵士の命が助かったのだという彼等の声で展示が決まりました。戦争展示は、見る人によって意見は異なるでしょうから難しいですね。

宮地 企画展を行い、いろいろな立場の人の批判を仰ぐことはどうしても必要なことですね。

講談の面白さ、その背景

宮地 英米では小説家と歴史家の違いは明確です。中国は中国で歴史に対して非常に厳しい。日本はそうではありません。NHKの番組でも何かあると小説家が出てきて歴史を語る。国によって歴史の語られ方が違うのです。江戸時代は何を介して歴史を意識したかということ、「御記録」というものを介してです。家康がなぜ將軍になったかという、その正当談を繰り返し軍記物（軍書）で講釈する。当初は話の上手な素人が講釈していたのが、それが、民衆が娯楽を求めるようになって、職業的講釈師が生まれるのです。ですから、日本人は講釈師の語る歴史を歴史として聞くのです。講釈師も、現実に起きた話をすぐ聞きたいという要望にこたえていく。字が読めない人が圧倒的ですから、話すわけです。ただし、町奉行所の同心も聞いていますから、変なことを言うと捕まります。明治以降の弁士中止と同じで、講釈師中止になってしまう。しかも講釈師は集めた材料を実録物として貸本屋に回していました。講釈師は史料編纂と歴史物の執筆に関係していたのです。材料を集めなくては話せま

せんでした。明治になると、新聞が彼らのネタになる。講釈師の話は民衆は口語体で聞く。講釈師は自分の話を文章化しないので、速記者がやるのです。それを起こすということで、明治19年に、講釈師の話や落語家の話を載せる新聞として、「やまと新聞」が出ました。日露戦争後になると、小説家自身が言文一致の文章を書き始める。小説自身が非常に広い読者にここで受け入れられ始めるのです。講釈師の面白い話を文章化しようとしたのが、講談社の野間さんの発想で、『講談倶楽部』が明治の末に創刊される。そこで初めて、「書き講談」というジャンルが出てくる。速記者が文章化したのを、『講談倶楽部』に載せるのですが、そこに浪花節の文章などを載せ始めると、やはり格が違う。落語家と講釈師の間でも当時は格が違いました。自意識が非常に強い人たちだから、講談師の方がボイコットしてしまう。それで初めて、文筆家に「書き講談」を書かせるということで、初めて歴史の語りが小説になり始める。それが時代小説に成長していくのです。日本人が歴史を聞く場合の聞き方とも関係があって、時代小説家が歴史を語る語り手になりました。「歴史は物語りだ」という言い方も、なにも新しいものではなく、日本では江戸時代からの、良かれ悪しかれ日本的伝統を受け継いでいるものなのです。ところで講談というのは、4日なら4日、10日なら10日、ぶっ通しで話さなければなりません。「講釈師、かたきや明日に、逃げのびて」と18世紀の川柳に既にあるように、話の起伏をつくらなければならない。そして起承転結です。話の発端は何か、結論は何か、盛り上げりをどうするか、歴史の叙述ではなくて、『三国志』、『水滸伝』など日本の民衆が楽しんできたフィクションが入ってきます。何が「因」で、何が「果」なのか。盛り上げ場所を盛り上げて、最後はやはり当時の価値観、しかも「講釈師中止」をくらわない権力批判の欠如したもので終わらないと、絶対講釈できませんでした。

中村 ゼミで阿部謹也さんの『日本人の歴史意識』を取り上げたのですが、興味が乗りませんでした。あれは世間論でした。軍記物と講釈師など日本人の歴史意識が書いてあったら、面白かったと思うのです。

博物館の情報論・人材論

中村 歴博の館長さんとして、我々のプロジェクトに対

するご意見をどうぞ。

宮地 今日、歴博が抱えている問題は歴史表象論です。資料を、いかに人に見せるか、しかもそれが学問的、科学的に間違いなく、どう可視化するのか。歴史表象論という学問を発展させるきっかけを、どこに作るかということです。歴史表象論を専門家のいないところでどう育てるかということです。このことは悪循環になりかねません。例えば、博物館が一番扱うのは技術史の問題ですが、学芸員養成でも美術史にはいくら専門家がいても、技術史はみな非常勤です。人材養成にしても、工学部は技術史には力を入れていませんし、教育学部は教育学部で、まったく自然科学の発想がない。このアポリアを解決できるかどうか。

2番目は専門的職業訓練とそのための資料学の問題です。ある特定の資料群を、全体として目録化する実践をやらないと、いくら理屈を言っても駄目だと思います。扱う材料のなかには、引札も、古写真も、文書もあります。ビデオもある。この全体をどう目録化できるか。この訓練の中で職人が養成されるのです。ただし資料学がなければ訓練できません。一番歴史で大事なものは、年月日の確定です。例えば、この写真は、裏に東京印刷局とある。東京印刷局はどこにあり、いつからいつまで市販写真を撮ったのかという資料研究を行わなければならない。文書あるいはマテリアルズを整理する資料学をつくっていかなければならない。私としては、本腰入れて写真の資料学というのをやりたいですね。特に明治前半、普通の素人写真が出てくる以前、コロジオン写真の段階はモノと資料を集めないと、一点一点の写真の年代がわかりません。そういう資料学を集団で研究しないと駄目な段階なのです。

いまの学問段階で、アーキビスト養成だけでいいと思っている人はほとんどいないでしょう。非文字資料、画像資料も使い、われわれ博物館の人間とも一緒に行う資料学の緊急の課題はなにか、この検討が神奈川大学も含めて客観的に求められています。現状を一言で言うならば「史料の現段階に研究者が大幅に立ち遅れている」ということです。

中村 なるほど、そうですね。今日は貴重なお話をどうも有難うございました。